



守山市 発達支援センターだより

令和5年9月号

令和5年9月15日発行
守山市発達支援センター（発達支援課）
守山市下之郷三丁目2番5号 すこやかセンター内
Tel：077-582-1158 Fax：077-581-1628



～子どもを支援している自分自身のことは大切にできていますか？～

よく聞かれることだと思いますが、子どもを支援する上で、子どもに肯定的に関わることは非常に重要です。子どもが適切な行動をした時に、ほめられる等の子どもにとって“いいこと”があることで、大人にとっても子どもにとっても適切な行動が増えていくことにつながります。これは、子どもが手ごたえややりがいを持って過ごすことにもつながり、子どもと関わる上で優先的に考えたいことです。一方、感情的に叱責したり罰を与えたり、楽しみを没収したりすることは、即効性があり、一時的に問題となる行動を減らしやすいですが、適切な行動が増えることにはつながらず、数々の“副作用”が出てくることも多いです（例：大人も子どもも否定的感情ばかり積み重なる、大人に隠れて不適切な行動をするようになる、“大声を出す”などの大人の問題解決の仕方を模倣する、子どもは罰などへの“耐性”がつき、大人側がエスカレートしやすい等）。

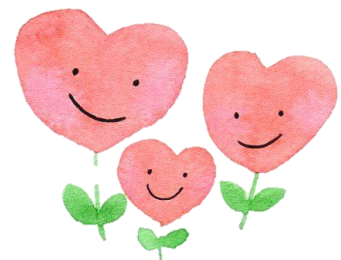
※ほめることについては、以前の発達支援センターだより（令和3年3月号：HP参照）に、もう少し詳しく掲載していますので、よろしければご参照ください。

こうして、子どものいいところに気づいてほめていくこと、そのために子どもを取り巻く環境整備や関わり方を工夫することは、色々と考えたり、試したりと（でもすぐには効果が出なかったりして…）、支援をする上で大変なことも多いです。

お腹が空いている時ほど、先々のダイエットよりも目の前のケーキに飛びついてしまって後悔するように、支援する大人の側が忙しすぎて時間がなく、疲れ切っていると、普段だと叱らないようなことでも叱る（＝即効性がある）ことに頼りやすくなります。そして、そのことでまた落ち込んで余計にイライラして…というような悪循環にもなりやすいです。

自分自身が余裕を持つこと、そのために自分自身を労ること

（例：意図的に自分にとって心地よく感じる活動をする、十分に睡眠をとる、誰かに相談する等）は、子どものよりよい支援につながります。子どもを大切にすることと同じように、自分自身も大切にすることを忘れないようにしましょう。



おしらせ

「発達障害を知ろう」～市民啓発講座を開催します～

参加費無料
（定員300名）

テーマ：“発達障害”はじめてのいっぽ 学齢期編～学齢期からはじめる就労への準備～

日時：12月2日（土）午後2:00から午後4:00時まで（開場 午後1:30）

場所：守山市民ホール 小ホール

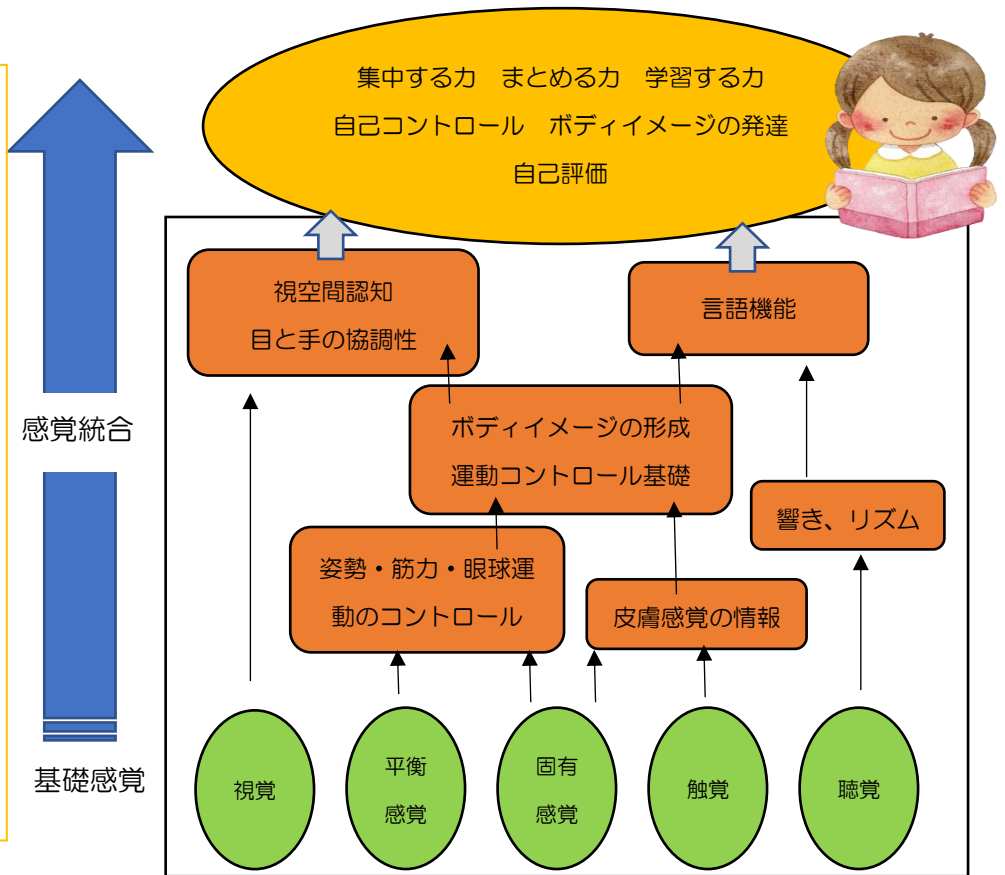
講師：滋賀医科大学 小児科学講座（小児発達支援学部門）特任准教授 阪上 由子氏

対象：守山市内在住・在勤の中学生以上の方

※詳細は11月頃に広報やホームページ等に掲載します。

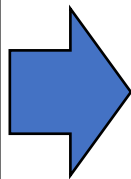


私たちの感覚には、**五感**（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）や体の傾きを感じる“**前庭覚（平衡感覚）**”、筋肉の状態を感じる“**固有受容覚**”などがあります。基礎となる感覚が関係し合いながら、運動や学習の力が積み上がっていきます。必要な情報を感覚器官から受け取って、適切な運動・生活動作に結びつけることが感覚統合の重要な働きの一つです。今回はこうした「**感覚統合の視点に基づく遊び**」についてご紹介したいと思います。



平衡感覚につまずきがある

- ・鈍感な場合
姿勢をまっすぐ保てない
回る遊具やブランコが大好きで離れがたい
- ・敏感な場合
のりもの酔いをしやすい
動く遊具が怖い、嫌い



平均台やトランポリンでバランスをとる遊びは平衡感覚を育てます。敏感で抵抗がある子は、小さな段差から飛び降りる、シーツブランコ（シーツにくるまって揺れる）、スケートボードで腹ばいに乗るなど、本人にとって安心を感じられる遊びから始めることがおすすめです。



固有感覚につまずきがある

- ・鈍感な場合
こまかな作業が苦手
力加減が調整しづらい
何かにぶつかる、転びやすい
机などをたたいて音を出すなど自己刺激的な行動がみられる



よじ登ったり、しがみついたり、踏ん張ったりといった体を動かさず遊びが苦手なのは、固有感覚が鈍感なのかもしれません。鉄棒にぶら下がる、ジャングルジムによじのぼる、すもう遊びなどの活動で体全体をしっかりと動かす遊びが効果的です。手先の器用さの向上にも繋がります。



特別な遊具などを活用するだけでなく、日常のちょっとした工夫の中で感覚統合につながる遊びを経験することができます。感覚統合に苦手さがある子どもには、それぞれ様々な特徴があり、子どもの特徴や課題に合わせた遊びや活動の設定を工夫しながら、経験の機会を設けましょう。